

(資料)

プラトン『クラテュロス』(内容梗概)

水* 崎 博 明

目次

- 第一章 名前の正しさといふ問題
- 第二章 ヘルモゲネースの「取り決めと同意」の説、ソクラテスのその含みの展開
- 第三章 「ヘルモゲネースの説」の吟味へ、「語り」の全体と部分との観点で
- 第四章 「プロタゴラス説」の批判、思慮と無思慮との存在から
- 第五章 諸々の事柄と諸々の行為との自然本性といふこととの存在
- 第六章 自然本性に即してこそその「語ること」そして「名づけること」

第七章 「道具」といふこと、「道具としての名前」の使用

第八章 「名前」の定義から「名前の制定者」まで

第九章 立法家の条件

第十章 「形を立てる」ことと製作者・使用者、使用者の判定

第十一章 課題「名前の正しさ」をホメーロスの神々の呼ぶところと人間どものそれとの相違に学び始める

第十二章 ホメーロスの「名前の正しさ」についての思惑の痕跡

第十三章 種族の血筋において名前を呼ぶホメーロスの「名前の正しさ」、ただし、その「あり」を明らかにする力に拠る音節と

文字との外見の多様

第十四章 自然本性に反した者の「名前の正しさ」からはじめてヘシオドスの神々や人間のそれへ

第十五章 「名前の正しさ」の一層詳しい考察の向かふべきところ——常に存在するものごと

第十六章 「神々」「ダイモーン」「英雄たち」の名前について

第十七章 「人間」「魂」「身体」

第十八章 「神々の名前の正しさ」について取るべき態度、そして先づ「ヘステイアー」

第十九章 「クロノス」「レアー」「テーテュス」「ポセイドーン」「ブルートン」「ハデース」

第二十章 「ハデース」

第二十一章 「デーメーテル」「ヘーラー」「ペルセポネー」「アポローン」「アテーナー」「ヘーパイストス」

第二十二章 「アポッロン」「ムーサイ」「レートー」「アルテミス」

第二十三章 「ディオニュソス」「アプロディーテー」「アテーナー」「ヘーパイストス」「アレース」「ヘルメース」

第二十四章 「パーン」「太陽」「月づつ」「星々」

第二十五章 「火」「水」「空気」「アイテール」「大地」「季節」「年」「歳月」

第二十六章 「思慮」「認識」「知」「節制」「知識」「理解」「智慧」「善きもの」

第二十七章 「正義」と「正しいもの」

第二十八章 「不正」「勇気」「男性的」「男」「女」「女性的」「乳房」「発芽する」「技術」

第二十九章 「仕掛け」「悪徳」「臆病」「徳」「悪い」「醜い」「美しい」

第三十章 「裨益するもの」「得なもの」「引き合ふもの」「助かるもの」

第三十一章 「裨益しない」「助けとならない」「引き合はない」「有害な」「損をする」

第三十二章 「快」「苦痛」「悲しみ」「痛み」「苦しみ」「悩み」「喜び」「心地よさ」「愉快」「欲求」「テュモス」「欲望」「憧れ」「恋」「思惑」「随意の」「必然」

第三十三章 「名前」「真理」「虚偽」「あるもの」「あり」「あらぬもの」、「要素的な名前それ自身」の正しさ

第三十四章 「最初の名前の正しさ」の問ひへ

第三十五章 要素的な名前の「あり」の摸倣は如何に

第三十六章 目下の課題を前にしてのソクラテスの自意識

プラトン『クラテュロス』（内容梗概）（水崎）

第三十七章 諸々の字母の「あり」の摸倣の力の分割について

第三十八章 今や再びクラテュロスを交へての「名前の正しさ」の議論となる。

第三十九章 「名前」が似るその似方の問題

第四十章 「名前のテュポス(型)」といふ認識の問題

第四十一章 「慣用」そして「取り決め」といふ名前の正しさの問題へ

第四十二章 名前の能力を問ふて

第四十三章 「ある」とされる諸々の事柄を事柄自身を通じて学び探求すること

第四十四章 アイデア論的な思索へ向かつて

第一章 名前の正しさといふ問題

1. ヘルモゲネース、クラテュロスにソクラテスの議論への参加について同意を求め、ソクラテスにクラテュロスの思はせぶりな名前の説を紹介する。すなはち、クラテュロス曰く――

イ、名前の正しさが存在するものどもの各々にとって自然本性的に生まれついたものとしてあるといふこと

ロ、そのものはそれを或る人々が呼ぶべく取り決めて呼んでゐるところの名前ではないのだといふこと

ハ、右のイロの場合、人々は自らの言語（声）の部分を生に出して呼んでゐるのであるが、その名前ではない。否、或る正しさが諸々の名前のだとして存在し、ヘラスの人々にも外国人にとっても同じものとしてすべての人々にとって生まれついてあるのだといふこと

ニ、具体的に――彼その人に「クラテュロス」は真実に名前である。ソクラテスに「ソクラテス」が名前である。他のすべての人々にとってもそれをこそ名前としてそれぞれ読んでゐる名前が各々にとつて名前であるかと問ふとすれば、遺憾ながら、ヘルモゲネースにとつては「ヘルモゲネース」は名前ではないし、それはよしすべての人々がさう呼んだとしてもである。

2. 右の理由に対する説明の不明確、空とぼけと知つた振りの態度での終始、その気になりさへすればとの態度

3. クラテュロス説の解釈を或いは自説の開陳をと、ヘルモゲネース、ソクラテスに願ふ。

4. 対するソクラテスの返事

イ、昔からの諺「麗しきは学ぶに難し」はまた諸々の名前についての学びのこともである。

プラトン『クラテュロス』（内容梗概）（水崎）

ロ、プロディコスからその問題の講義を聴いてはゐないので真実を知ってはゐない。

ハ、ヘルモゲネースとクラテュロスとの共同探求の用意はある。

ニ、「ヘルモゲネース」がその名前にあらずとは「幸運のヘルメース」の「生まれ」との名前にヘルモゲネースその人が当たらないのではないかとの冗談であらう。

ホ、知ることは困難だが事の真実の共同探求は必要である。

第二章 ヘルモゲネースの「取り決めと同意」の説、ソクラテスのその含みの展開

1. ヘルモゲネース、自説を開陳する――

イ、「取り決め」と「同意」こそが名前の正しさである。

ロ、理由——何を名前として立てようともそれが正しいものである。それは名前をつけ直しこれまでの名前を呼ばず新たな名前を呼ぶやうになっても、後の名前が正しい名前である。それは奴隸の名前のつけかへのままである。自然本性的に各々名前があるわけではなく、否、それは習慣づけて行き呼び習はして行く人々の法習と習慣にこそ拠るのである。

ハ、この説がもし当たらなければ学び聴く用意はあること

2. ソクラテス、右の説を受けて

イ、ヘルモゲネース説の確認——それとしてこそ人が各々のものを呼ぶもの、これが各々のものには名前である。

ハ、「語り」のそれとしては名前以上に小さな部分を語ることはない。

ニ、して見れば、その真実な語りのものだとしてあるものもまた、語られてゐるのである。

ホ、とにかく「真実なもの」としてこそ語られてゐる。

ヘ、虚偽の語りの部分は虚偽である。

ト、して見れば、名前を虚偽なるものとしてまた真実なものとして語ることが、いやしくも「語り」をもさう語ることがあるのならば、あり得るのである。

3. 同右(その三)

イ、して見ると、各人が或るものにとってその名前だと主張するものが各々のものにとって名前なのだろうか？

ロ、右の疑問の立場で「人がそれだけが各々に名前であるとするそれだけが、そしてさうなのだと定めるその時に名前であるのだろうか」と疑問を続ける。

ハ、対するヘルモゲネースの回答——前に主張した論点の再主張

第四章 「プロタゴラス説」の批判、思慮と無思慮との存在から

1. ソクラテス、問ふ——「あるとされるものども」(タ・オンタ)のあり方は次のどちらであるか？

イ、私的にそれらの「あり」(ウーシア)は各々にとって存在するのか。すなはち、プロタゴラス説「すべての事物の尺度は人

間」であり、「そのやうなものとして一方私に事柄が現れるならば、そのやうなものとして私にとってあるのであり、他方さうしたものとして君に現れるならば、そのやうなものとして君にはある」のか。

ロ、事柄はその「あり」のそれら自身の何かの確固たるあり方を持つのか。

2. ヘルモゲネースの返答——プロタゴラス説への流されの経験とその信じ難さの思ひと

3. 「プロタゴラス説」を考へるための二人の問答

イ、或る人間は劣悪であると思はれたかどうか。

ロ、有用な人々があるとは思はれなかったかどうか。

ハ、有用な人々は思慮のあるものであり、劣悪な人々は思慮の欠けたものである。

4. 問答からの結論——プロタゴラスが真実を語ってをり真実とはそれなのであれば、右の「我々の中の或る人々は思慮ある者だが或る人々は無思慮な者である」といふことは取り出せない。

5. 4の意味するところの確認——思慮と無思慮とが存在する限り、プロタゴラスが真実を語ることは不可能である。

第五章 諸々の事柄と諸々の行為との自然本性といふことの存在

1. 「エウテュデーモス説」の「すべてのものにとってすべてのものが、同じやうに、同時にかつ常に、あるのだ」といふ思ひなしの拒否、それでは有用・劣悪の区別が失はれるから。

2. 1に基づく結論——

イ、万有はそれら自身のとじてそれら自身の或る確固とした「あり」を持つてあること、すなはち——

ロ、諸々の事柄は、我々との関係であるのでも我々によって上を下へと我々の表象によって引きずり回されるものでもない。

3. 一方での事柄のさうした本性の確認に加へ他方での事柄においての諸々の行為が同じ向きであること、すなはち、それら行為もまた「あると語られるものども」の一つの或る形であること

4. 確認——それら自身の自然本性に即してこそ諸々の行為は行為されて行くものであり、我々の思ひなしに即してではない。すなはち——

イ、存在するものどもの何かを我々が切らうとすれば、我々は我々の好きなままに、かつそれでもってと欲するままに、切るべきか。それとも「切ること」の「切られること」のその自然本性に即して各々のものを切らうと欲するならば、我々はきつと切ることであらうし、より多くが我々にはありそのことを全うになすであらう。だが自然本性に反してであれば、我々は必ずや過ち何一つ行ふことはないだらう。

ロ、「焼く」場合も右と同様、すべての思ひなしに従ってではなく全うなそれに従ふべし。そこには「焼く」「焼かれる」の自然本性が存在する。

ハ、他のことどももまた同様

第六章 自然本性に即してこそその「語ること」そして「名づけること」

1. 前章の考察を「語ること」にも適用する・すなはち、かうではないか――

イ、その仕方では語るべしと思はれるその仕方では語れば全うに語るのか。それとも事柄がその仕方ではこそ本来語るにつけ語られるにつけ生まれてくるその仕方では、またその道具立てでもって、語れば、一層よく語る。

ロ、自然本性に従はなければ人は過ち、なすところがない。

2. 「語る」ことの一部分は「名づける」ことである。我々は名前前で区別して行きながら諸々の語りを語ってゐる。

3. 「名づけること」は行為である、いやしくも「語ること」もまた事柄をめぐっての行為であったのであれば。

4. 再確認――諸々の行為とは我々にははっきりと現れた、我々との関係であるのではない、否、それら自身の或る私的な自然本性を持ってこそあるのだ、と。

5. 一つの結論――我々は名づけなければならない、事柄が名づけるべくも名づけられるべくもさう生まれついてゐるその仕方でもってこそ、またその道具立てでもってこそ。我々の欲するままであってはならない。

第七章 「道具」といふこと、「道具としての名前」の使用

1. 「道具」といふこと、「道具としての名前」の使用

プラトン『クラテュロス』（内容梗概）（水崎）

イ、それを切る必要のあったものを「何かでもって」切る必要があった。

ロ、「織る」「穴をあける」「名づける」場合もまた同様にその「何かでもって」といふことがある。

ハ、その「何かでもって」といふことのそれぞれの場合の確認——錐、杼、名前

ニ、一種の道具として「名前」もまたあるのだといふこと

2. 「道具」の使用といふこと——

イ、「杼」とはそれでもって我々が織る道具、その道具たる「杼」を使用しつつ、縦糸と横糸とをより分けてゐる。

ロ、錐やその他の道具についてもそのあり方が言へる。

ハ、「名前」が道具である際にその「名前」を使用して我々は何をしてゐるのか。

ニ、我々は相互に何かを教へ合つてゐるのであり、事柄が如何にそのあり方があるかを区別してゐるのである。

第八章 「名前」の定義から「名前の制定者」まで

1. 「名前」の定義——それは一種の教示的にして「あり」を区別する道具である。類比——「杼」が織り糸の区別の道具であることとの、(然るに、とにかく「杼」は織物に関してゐるものである。)

2. 更に一つの類比を——

イ、織物に熟達してゐる者こそが杼を見事に、すなはち織物の技術に適ふ仕方、使ふ。他方、教示の心得のある者こそが名前

を見事に、すなはち教示の心得のある仕方、使ふ。

ロ、「見事に使ふ」といふことに關して——「織り手」は技術のある大工の作品を、「穴をあける者」は技術のある鍛冶屋の作品を見事に使ふ。

ハ、「教示の心得のある者」の場合どうか？ 慣習（ノモス）こそが諸々の名前与へる。すなはち——

ニ、慣習を定める者の作品を、教授の心得ある者は、彼が名前を使ふ時には、使ふであらう。

3. 問題の要である「慣習を定める者」とは誰か？ それは人皆がではなく、技術を持つ者こそである。

4. 3の含意——「名前を立てる」ことは万人のよくするところではなく、誰か或る「名前の制作者」のすることである。「名前制作者」とは「慣習を定める者」であり、彼はすべての工作者らの中で最も僅かな者として人々の中に生ずるのである。

第九章 立法家の条件

1. ソクラテス、類比的に問ふ——

イ、「立法家」は何処へと眼差しを遣りながら諸々の名前を立てるのか？

ロ、「大工」は何処へと眼差しを遣りながら杵を作るのか？ この問ひには「杵の働きをすべく生まれついでるものへとである」が答へであれば。

2. 大工が杵を製作中に杵が壊れたならば、大工はどうするか。

イ、壊れた桴に向かって眼差ししながら別の桴を制作するか？

ロ、彼の「形」へと向かって、すなはちそれに向かってこそ眼差ししつつ壊れた桴もまた制作してをったその形に向かってであるか？

ハ、回答——ロである。

3. また類比的に問ふ——

イ、薄手の或いは厚手の或いは亜麻の或いは羊毛の或いはどのやうな何かであれそのものの布地のために桴を制作することが必要である場合には、すべての桴は先づは桴の形を持たねばならぬが、他方では、各々にとって最も美しく生まれついでるその自然本性を各々の作品の中へと与へ返すのでなければならぬ。

ロ、他の諸々の道具についてもまた同じ。すなはち、自然本性において各々のものにとり生まれついでる道具を発見した上でそれから制作するそのものの中へと与へ返さなければならぬ。すなはち、その一例——自然本性において各々にとって雖として生まれついでるものをこそ鉄の中へと置く術を人は知らねばならぬ。

ハ、また自然本性において各々のものにとり桴として生まれついでるものを木の中へと然り。自然本性において布地の各々の形にとって各々の桴が生まれついでるたし、他も同様だから。以上との類比において——

4. 類比的結論——

イ、各々のものにとりて自然本性において生まれついでる名前をまた立法家は諸々の音声と文字との中へとおく術を知ってゐなくてはならない。

ロ、まさに名前であるものへと向かって眼差ししつつ、すべての名前を制作しなければならない。それが諸々の名前の權威ある制定者たる条件である。

ハ、諸々の同じ音節の中へと各々の立法家が置くことがないとしても、かく知るべし。すなはち——同じ鉄の中へとすべての鍛冶屋が置くわけではない、同じことのために同じ道具を制作しつつあっても、と。すなはち——

ニ、同じ姿を彼が与へ返してゐる限りは、よし他の鉄の中にはあれ、正しくそのあり方があるのだ、その道具は。よしこの地で制作するにせよ外国で制作するにせよ。

ホ、結論的確認——立法家もまたこの地の者諸外国の者も名前の形を各々のものに相応しいものとしてどのやうな音節においてあれその中に与へ返すその限りは、この地の者も或いはどういった他所の地の者も何ら劣ることなく立法家なのである。

第十章 「形を立てる」ことと製作者・使用者、使用者の判定

1. 設問——「相応しい形」が置かれてゐるかどうかの判定者の問題

イ、杼の相応しい形の木材の中で置かれ方如何の判定は、その製作者か使用者たる織り手か？ その答へが使用者であれば

ロ、堅琴作りの作品の使用者は誰か？ 作って行く者に対して最も見事にその監督となる術を知り、作られてゆくものをそれがよく達成されてゐるかどうかを認識する者である。すなはち、堅琴弾きである。

ハ、船大工の仕事の使用者は？ 舵取りである。そこで類比的に——

ニ、「立法家」の作品に対して最も見事にその監督者となりかつ作品が仕上げられてゆくのを判定するのは誰か？

ホ、ニの問ひの回答——使用するものである。彼は問ふ術を知つてゐるが、その同じ者が答へる術をも知つてゐる。すなはち、

問答家

2. 1の要点——

イ、大工の仕事は舵取りが監督してゐる際に舵を制作すること

ロ、立法家の仕事は名前を制作すること、問答の心得ある人を監督者として持ちながら

3. ソクラテス、以上を総括して結論を述べる——

イ、名前の制定は詰らぬことでも詰らぬ人々のことでも行き当たりばつたりの人々のことでもない。

ロ、クラテュロスは真実を「自然本性において諸々の名前が諸々の事柄にとつてはあるのだ。そしてすべての人が諸々の名前の

工作者ではない」と語りながら真実を語つてゐた。すなはち——

ハ、自然本性において各々のものに名前であるものの中へと眼差ししながらそのものの形を文字と音節との中へと置くことの出

来る人、その人だけなのだ、と。

4. ヘルモゲネースの感想——

イ、ソクラテスの言葉に反対は出来さうもない。

ロ、だがしかし、さう俄かにも納得も行かない。

ハ、納得するには「自然本性においての名前の正しさ」がソクラテスによって示される必要がある。

5. ソクラテス、その感想の表明を受けて――

イ、ソクラテスその人としては何一つ正しさを語ってはゐないこと

ロ、ソクラテスは知ってゐるのではない。共同の考察を意図するだけだ。

ハ、目下、しかし共同の考察からかう明らかとなった。すなはち、自然本性において或る正しさを持ちつつ名前はあること、すべての人のこととして、その名前を如何なる事柄にであれそれに立てることは、あるわけではない。

第十一章 課題「名前の正しさ」をホメーロスの神々の呼ぶところと人間どものそれとの相違に学び始める

1. 目下の課題の確認――ヘルメゲネースの欲求の通り、それは「名前の正しさとは一体何か」の探求である。

2. 考察の仕方は？ それは諸々の知ってゐる人々とともにこそといふ仕方である。すなはち、彼らはソフィストラであり、彼らに賢者と思はれるべくも金錢を支払ひ感謝すべし。兄カリアスそのままに。遺産を相続しなかつたからには兄からプロータゴラスの教へを教へて貰ふべし。

3. ソクラテスの右の勧めに対するヘルメゲネースの反応――プロータゴラス説には不承知であるとの表明

4. ホメーロスその他の詩人たちに学ぶべきことの示唆、神々の名前の呼び方と人間どものそれとの相違において、我々は名前の正しさも教へられること、すなはち――

イ、ヘーパイストスと一騎打ちした川を、神々はクサントス人間どもはスカマンドロスと呼ぶ。

ロ、（或る鳥を）神々はカルキスと呼び、人間どもはキュミンデイスと呼ぶこと

ハ、人間どものバティエイアと神々のミュリネーとの別

ニ、ヘクトールの息子たる者の名前、スカマンドリオスとアステュアナクスとの別

ホ、その別においてどちらが名前として正しいかのソクラテスの問ひ、分らぬとのヘルモゲネースの返事

第十二章 ホメーロスの「名前の正しさ」についての思惑の痕跡

1. 諸々の名前をより正しく呼ぶのは「より思慮ある人々」であるか、それとも「より無思慮な人々」であるか？
2. 女たちと男たちとはどちらがより思慮ある者であるか？
3. ヘクトールの子供は、ホメーロスに拠れば、トロイアの人々には「アステュアナクス」と呼ばれ、婦人たちには「スカマンドロス」と呼ばれた。
4. 時に、ホメーロスもまたトロイアの男たちを女たちよりも賢いと思つてゐるからには、「アステュアナクス」こそより正しい名前であるかと考へてゐるはずである。
5. 問題——何故にホメーロスはさう考へたのか？ ホメーロス自らの明かすところである。すなはち——彼はただ一人で町と長い城壁とを守つたのだ。救ひ主の息子を息子の父親がそれを守つたもののアステュアナクス（町の支配者）と呼ぶのは正しい。
6. その正しさ（守つたのは父親のヘクトールだったのに息子さんの方が守り手の名前で呼ばれることの正しさ）とは？

7. 6と類比的な問ひ——「ヘクトール」といふ名前の正しさの問題

イ、「ヘクトール」「アステュアナクス」はともにギリシアの言葉である。

ロ、「アナクス」「ヘクトール」は何か同じものをするししてゐる。ともに何か王的な名前である。

ハ、人がその「支配者」であるものはそのまた「所有者」である。

8. 以上はホメーロスの「名前の正しさ」についての思惑の謂はば痕跡に触れたもの

第十三章 種族の血筋において名前を呼ぶホメーロスの「名前の正しさ」、但し、その「あり」を明らかにする力に拠る音節と文

字との外見の多様

1. ホメーロスの「名前の正しさ」についての思惑の痕跡——「ヘクトール」対「アステュアナクス」||「馬」対「馬」、但し、「馬」から「馬」とは自然本性的に生まれてといふことである。自然本性的にはなく「馬」から「子牛」が生まれる。種族の血筋においてこそ生まれたものの名前は呼ばれる。

2. 右の伝で——

イ、「王」から何か子孫が生まれたなら、それは「王」とこそ呼ばれるべし。但し——

ロ、いろいろと異なつた音節において同一のものがしるしするとしても、問題はないこと

ハ、何か文字が付加されてあつても除去されてゐても事柄の「あり」が名前の中に明らかにされてゐて力をもつてゐれば、これ

も問題はないこと

3. 2のハの説明――

イ、我々は字母の名前を字母そのものとしては語らない。但しエプシロン・オミクロン・オーメガの場合は除く。

ロ、その他の有声のまた無声の字母に対しては諸々の他の文字を付加して名前としながら語ってゐる。

ハ、しかしながら、字母の力を明らかにされたものとして中におく限りでは、そのもの（字母）を我々に明らかにするであらうその名前を呼ぶことは全うなのである。

ニ、その例としての「ベータ」――字母βの他に「エータ」「タウ」「アルファ」が付加されてあるが、何らの支障もこれを来た

してはるない、立法者が欲したその字母の本性を名前の全体で明らかにするには。

4. 2の再確認――

イ、各々の種族から同種の子孫が生まれるにおいて、同種たる親と子とは同じ名前が呼ばれるべきである。

ロ、だが諸々の音節にはそれらが色々様々であつてよい。

ハ、だがそのハからして素人には同じものであつても互ひに異なるものとさへ思はれる。

ニ、問題は「力」や「効能」であつて、医者や薬の現れがどうあつても「力」や「効能」はそれらをちゃんと把握するのである。

ロハの問題はさうした問題に過ぎない。

5. かうした理解に沿つてこそ「アステュアナクス」「ヘクトール」「アルケボリス」といふ名前が音節や文字の外見の相違にも関わらず名前としての「力」は同じであることを（またそこにおいてこそ「名前の正しさ」もあることを）思はなければならない。

6. 5と類比的に――

イ、將軍の名前――アギス・ポレマルコス・エウポレモス
ロ、医者の名前――イアトロクレース・アケシンプロトス

第十四章 自然本性に反した者の「名前の正しさ」からはじめてヘシオドス的な神々や人間のそれへ

1. 自然本性に反して生まれたものどもにとっての「名前の正しさ」の問題――

イ、その例――「善き敬虔な男」から「不敬虔な男」が生まれる場合である。

ロ、その正しい名前のあり方――「馬」が「牛」の子を産んだ場合には産んだ「馬」の種族ではなくそれとして生まれた「牛」の種族の名前でこそ呼ぶべきであったやうに「敬虔な人」から生まれた「不敬虔な人」も同じくその「不敬虔な種族」の名前をこそ与へるべし・「テオピロス（神の友）」とか「ムネシテオス（神を記憶する者）」とかなど呼ばれてはならない。それらと反対のものどもをしるしする名前を与へ返すべし。

ハ、ロの格好な例――「オレステース」（山の男）

ニ、その名前が如何にも格好である理由――その本性の獸的などころ、彼の野生、山棲みなどころを、その名前でもって示してゐるから。

ホ、また格好な例――「アガメムノン」

プラトン『クラテュロス』（内容梗概）（水崎）

へ、同じくその理由——彼にとって思はれたことどもを最後まで貫き通し忍耐する、その際結末を、その思はれたことどもに対して「徳」の故につけてさうするといった人物だから。

ト、その忍耐の証拠——トロイアにおける大軍の止めと忍耐

チ、「アガ멤ノン」といふ名前が如何にその「あり」を明らかにしてゐるか——「エビモネー」（留まること）において「アガストス」（誓むべき）であることが「アガ멤ノン」なる名前には見られる。

リ、また格好な例——「アトレウス」

ヌ、理由——アテーラ（破壊的な）、アティレス（強情な）、アトレストン（大胆）、アテーロン（破壊的な）あり
ル、「ペプロス」の場合——近くのものを見る者

ヲ、「タンタロス」の場合——「タランタイアー」（揺れ動き）「タランタトス」（最も惨めな）

ワ、「ゼウス」の場合——「ゼーナ」「ディア」（彼の故にこそ生きる^{ゼー}ことが）

カ、「クロノス」の場合——「クロノス」つまり「コロス」は子供をしるししてではなく彼の「カタロン」（純粋なもの）でその知性の「アケーラトン」（混ざり気のなき）をこそしるししてある。

ヨ、「ウーラノス」の場合——「ホローサ タ アノー」（見てゐる 上方のものを）

2. ここでソクラテス、ヘシオドスの『神統記』の忘却に託けて以上のやうな「名前の正しさ」の話を打ち切る。

3. ヘルモゲネース、ソクラテスの話し神がかりを言ふ。

第十五章 「名前の正しさ」の一層詳しい考察の向かふべきところ——常に存在するものごと

1. ソクラテス、以上の「名前の正しさ」についての神がかりの智慧をエウテュプロンの所為にする。そして今日のところはその智慧を用ゐておき明日はそれを清めるのだと言ふ。

2. そして何処から詳しい考察を始めたものかを問ふ、すなはち——

イ、我々は或る型（テュボス）の中へとは歩み行ったところである。

ロ、その考察でもって「諸々の名前自身が我々に証言して各々がひとりであるのではなく或る正しさを持つのだとすること」を見ることを目指す。

3. 考察の向かふべきところの見当づけ

イ、考察をむしろ放棄すべきところ——諸々の英雄たちや人間どもの名前は恐らく我々を騙すであらう。

ロ、騙す理由——それらの名前の多くは一方先祖の名前に即してあって彼らには相応しくないし、他方、多くは人々の祈りによつての名前だから。例——エウテュキデス（幸運な男）、ソシアス（救ひ手）、テオピロス（神の友）

ハ、考察を差し向けるべきところ——常に存在し本性上存在すべあることども

ニ、その理由——そこでは諸々の名前の制定に関して真剣になるに相応しいから、それらの或る名前は人間どもの力よりもより神的な力によって制定された。

第十六章 「神々」「ダイモーン」「英雄たち」の名前について

1. 考察の始め——神々の名前、「神々」とは如何なる道筋によって全うに呼ばれたのか。
2. ソクラテスの推測——最初のギリシア人は太陽・月・大地・星々・宇宙のみを神々として信じ、それらを「走るもの」(テウー
ス)として観察しては「テオイ」と呼び名した。そこからの一般化
3. 次なる考察——ダイモーンたち
4. ソクラテスのヘシオドスによる推測——彼の黄金の種族・鉄の種族の神話——優良で高貴な種族——思慮分別のある者・
弁^{ダイモーン}へのある者といふ線で「ダイモーン」とヘシオドスは名づけた。
5. 次いで「英雄」(ヘーローズ)「恋」——(エローズ)からのなり方が明らか
6. その説明——
 - イ、英雄たちは半神である
 - ロ、英雄たちはすべて男神が人間の女を人間の男が女神を恋して生まれてゐる。
 - ハ、それ故、一つは「恋」(エローズ)の線から、もう一つは「賢者」「練達の弁論家」「問答家」の線で、すなはち「問ふ」(エ
ローターン)に十分であるところから、「述べる」(エレイン)ことは語ることである。

第十七章 「人間」「魂」「身体」

1. 「人間」の場合はどうか？

2. ヘルモゲネース、ソクラテスの答へを当てにするのをソクラテス、それはエウテュプロンの靈感に信用を置いてのことと言ひつつ語る——

イ、手の込んだ思ひつきが浮かんでまた今日にも恐らく必要以上に賢くならうなどの用心を語る。すなはち——

ロ、諸々の名前について必要な考慮を言ふ——「名前」に対する文字の追加挿入・省略・アクセントの変更

ハ、例——レーマ（表現・句）*Διφιλοῦ* の名詞化 *Διφιλοῦ* は *ι* を省略し、真ん中の音節の鋭アクセントを重アクセントに変更した。

ニ、逆に、挿入し重アクセントを鋭アクセントに変へる場合もあること

3. 右の知識を背景にして「人間」(*ἀνθρωπος*) の場合を語る——

イ、その自然本性の「あり」を明らかにする表現（レーマ）は *ἀναθραν ἀδρατε*（見たものを綿密に見る者）である。

ロ、*α* が一つ省略され、最後の音節が重アクセント化した。

4. 「魂」について——

イ、生気を与へる (*ἀναψυχον*) の説

ロ、エウテュプロン周辺の人々に納得を得よう説——すべての身体の自然本性を「魂」こそは所有しかつ把持する。他方、アナ

プラトン『クラテュロス』（内容梗概）（水崎）

一一一五

クサゴラスに拠れば他のすべてのものどもの自然本性を知性と魂とがすべからく秩序づけ所有する。して見れば、φυσέχρη (自然本性を把持し所有する) その力に対する名づけである。その洗練された語り方が *καλῶς* である。

5. 「身体」について——

イ、σώμα=σῆμα の説

ロ、σῆμα=σῆμα (身振りで示す) の説

ハ、オルペウス教徒たちの説——

第十八章 「神々の名前の正しき」について取るべき態度、そして先づ「ヘステイアー」

1. 神々の諸々の名前についての正しき——

イ、我々の神々についての無智を言ふこと——神々そのもの、神々の名前、神々自身の呼び方

ロ、我々の祈りの場合と同じく「神々の気に召すままに呼ぶ」こと

2. 「ヘステイアー」から始めるべし——

イ、最初の命名者たちの凡庸ならざること、高尚な議論をする人・或るおしゃべりたちであること

ロ、外国語とアッティカの言葉との比較の中から *phōs*, *phōs*, *phōs* の多様性がある。

ハ、*eoia* から理由を得ること

ニ、*eriv* (*Obia* の分有) から理由を得ること、*Obia* は *eoia* であつた。

ホ、犠牲の捧げ方から理由を得ること、最初にはヘステリアにこそ捧げる。

ヘ、*Dia* は *uoniv* (押すもの) であり、命名者はヘラクレイトスの万有流転説に従つた。

3. 次なる課題の提出——レアとクロノス、クロノスは検討済みであることとその不備の意識と

第十九章 「クロノス」「レア」「テーテュス」「ポセイドーン」「プルートン」「ハデース」

1. 前章末の不備の意識を説明する——ヘラクレイトスの古来の或る賢いことどもの、さながらクロノスとレアまで遡るもの、

そしてホメーロスも語つてゐたそれを、ソクラテスは見ること

イ、ヘーラクレイトス説——万有は移り行き何ものも留まらず。川の流れに擬へての「汝、二度と同じ川へと入るべからず」

ロ、他の諸神の祖先らに「レア」「クロノス」の名を立てて行つた者のヘラクレイトスへの同調、「流れるもの」名前の制定の必然

ハ、ホメーロス・ヘーシオドス・オルペウスらの同じヘラクレイトス説、「オーケアノス、神々の源、母であるテーテュス」と

言ふホメーロス、「オーケアノス、美しき流れが先づは第一に結婚を始め、彼は母を同じくする妹のテーテュスを娶つた」と言

ふオルペウス

プラトン『クラテュロス』(内容梗概)(水崎)

一一一七

ニ、これらの語り方の相互の同調とヘーラクレイトス説への張りの確認

2. 「デーテュス」について——「泉」の隠された名前なのだとの自らする語り、*διαιτῶμενον* と *θουόμενον* (篩ひ分けられたものと漉すされたもの)との合成 *ἤθη* からである。

3. 「ボセイドーン」について——

イ、一説—— *πόδες* と *δαίμων* との合成 (足と枷) たる *ποσίδαιμων* からである。付加された *ος* は飾り

ロ、また一説—— *πολλοίων* (*πολλα εἰδότης*) 「多くを見たる」からである。

ハ、また一説—— *σειών* (振動させるもの) と *χ* と *ο* との付加からである。

4. 「プルートーン」について—— *πλοῦτος* (富) の与へ手である。「富」は地下から

5. 「プルトーン」の別名「ハデース」について

イ、大方の理解—— *τὸ αἰδέεσθαι* (見えざるもの) がその名前で言ひかけられてゐるのだ。

ロ、「見えざるもの」の与へる恐怖から別名の方を人々はむしろ呼ぶのである。

第二十章 「ハデース」

1. ソクラテス自身の「ハデース」説へ——

イ、大方の人々の「ハデース」への恐怖は多くの誤りに基づく

ロ、死ねば彼処へ行き魂は肉体から裸にされるのだと恐れてゐる。

ハ、だがしかし、神の支配と名前とは何か或る同一なものへと帰趨するのである。

2. 1のハの説明――

イ、どんな生き物にとってにせよ、それにとって「縛り」であつて何処にもせよそこに留めるものとしては、必然より欲求の方が強力である。

ロ、されば最強の「縛り」でもつてこそ彼処へ至る人々を縛るのでなかつたら、多くの人々が「ハデース」を逃亡する。

ハ、して見れば、或る欲求でもつてこそハデースは人々を縛つてゐるのである。

3. 問題の核心たる「欲求」について――

イ、最強の欲求、それは人が或る者とともにありながら彼の故によりよき物であり得ようと思ふ場合のそれである。

ロ、それ故、「ハデースに縛られてゐる」とはハデースによつてすっかり魅了されてゐることである。すなはち――

ハ、ハデースはそれほどまでに美しい語りを語る。

ニ、完璧の知者であり、恩恵者である。

ホ、この地上の人々のそれほどの善き物事の送り手である。すなはち「プルートン」(富の送り手)の名前

へ、肉体を解脱した魂とともにあらうとすることはハデースが智慧を愛求する者たることを意味する。すなはち、その解脱こそは徳への欲求を図らせるもの、肉体の騷擾とともにあれば「クロノスの鎖」さへも人々を留め得ぬ。

4. 「ハデース」とは見えざるもの (aidēō) からではなくすべての美しきことどもを「知ること」 (eidenai) から。

プラトン『クラテュロス』(内容梗概) (水崎)

一一一九

第二十一章 「デーメーター」「ヘーラー」「ペルセポネー」「アポッロン」「アテーナー」「ヘーパイストス」

1. 「デーメーター」について——食べ物の与へ方が「母のやうに与へる」*διδόντα ὡς μήτηρ* といふところから
2. 「ヘーラー」について——

イ、一説——*ἐρατή* (或る愛らしき人) である。

ロ、また一説——上空のことを論じつつ立法者は「空氣」*ἀέρα* を *ἤρα* と隠しつつ名づけた。*ρ* を最後に置いた。

3. 「ペレパッタ」(ペルセポネー) について——

イ、多くの人々の無経験の故の「ペレパッタ」「アポッロン」の名前に対する恐れ、すなはち——

ロ、「ペレパッタ」の言い換へ *φεραφερόνη* は *φερεν φόρος* (殺害をもたらす) である。

ハ、だが、実はこの女神は知者である。何故なら *φερομενον* への *εἶταφή* (運ばれ行くものへの接触) を語るからして、むしろ *φερεταφά* こそが正しい名前だから。口調のよさからの「ペレパッタ」に過ぎない。

4. 「アポッロン」について——

イ、一般には *απολλύειν* (滅ぼす) といふ解釈

ロ、ソクラテス説——神の「音楽・予言・医術・弓術」の四つの力にその名前は調和してゐる。

1. よく調和した名前である所以の説明——浄化・償ひ・燻蒸・沐浴・灌水などのすべては人間を心身ともに清浄なものとして提供することの能力を行使してゐる。すなはち、「アポッロン」は ἀπολοῦναι ἀπολοῦναι (洗淨し解放する) 神である。

2. 「アポッロン」といふ名前のさまざまな因みのこと——
イ、右からして、一方諸々の解放と洗淨に即しては、さうしたことどもの医者たる意味で ἀπολοῦναι (洗淨者) だと正しくも呼ばれる。

ロ、他方、予言術と真実と単純とに即しては、ἀπολοῦναι と正しくも呼ばれる。テッタリア人の呼び方。

ハ、他方、弓術によって射撃において力あることから、ἀεγθαλοῦναι である。

ニ、他方、ムーサイたちの技に即しては、宇宙を回ってする ὀμοιοποιεῖν (ともにしての運動) は、すなはち ποιοῦν 歌の調和——諧調と呼ばれる——を回っては、すべてそれらは、音楽・天文学の論者らの主張のやうに、或る種の調和においてすべて一緒に ποιεῖν (回転する) してゐるのだといふことが標しされてゐる。「アポッロン」は調和によってそれらすべてを神々に即しても人間どもに即しても ὀμοιοποιεῖν (ともに回転させる) ながら監督をしてゐるのである。

ホ、音韻の ὀμο から α への変更—— ὀμοκέλευθος (道連れ) ὀμοκοιτις (寝床をともにする者) が ἀκοκοιτις や ἀκοιτις ともなるやうに、ὀμοιοποιεῖν は ἀπολοῦναι ともなつた。但し、α の挿入、ἀπολοῦναι は ἀπολοῦναι (殺す) の未来分詞形として解釈される。

嫌がられるから。だが、これは誤解に過ぎない。

3. 「ムーサイ」と「ムーサイの技」について——(μάοβα) 求める・探求・智慧の愛求から
4. 「レートル」について——

イ、一説——人の必要とするものについてその温和からして進んで聞き入れることから

ロ、また「一説——*ἄηρω*ではなく*ἄηρω*として、性格(*φθος*)の温和(*λατιος*)から*ἄηρω*と呼ばれた。

5. 「アルテミス」について——

イ、一説——健やか(*ἀρετιέ*)で慎みあること、乙女らしさの欲求の故に

ロ、また「一説——「徳の知者」(*ἀρετις γαρ*)から

ハ、また「一説——男の女における「耕作を憎む者」(*ἀροτον μαθησασα*)から

第二十三章 「ディオニュソス」「アプロディーテー」「アテーナー」「ヘーパイストス」「アレース」「ヘロメース」

1. 「ディオニュソス」について——

イ、一説——「酒を与へる者」(*δαδοῦς οἴνου*)である。

ロ、また「酒」(*οἶνος*)について——「分別ありとの思ひ込み」(*αἰσῶνος*)からである

2. 「アプロディーテー」について——ヘーシオドスの「泡より生まれた」の説の採用

3. 「アテーナー」について——

イ、その別名「パッラス」から——武具を鍛って踊る際に「振る者」(τάλαντυ, τάλανθοῦ) だから
ロ、「アテーナー」について——現代のホメーロス解釈者らの多くはホメーロスがアテーナーを「知性」かつ「思考」として創作したと主張したが、名前の制定者もまた「アテーナー」は「神の知性」(ἀ Γεωρία) だったのである。εの代わりにρを用ゐる、ιとωを取った。

ハ、「神に関すること」(Θεῶν) を他に抜きん出て「直知する」(τροπία) からといふ説

ニ、「性格におけるの知」(ἦθος, νόησις) から ἦθωσις となったが、Ἀθηνά と美称した。

4. 「ヘーパイストス」について——「光りを見し者」から、εのくっつけ

5. 「アレース」について——

イ、一説——「男らしさ」(ἀρετή) と勇敢なことに即して Ἀρετή である。

ロ、また一説——頑強と敵に背中を見せぬところに即して ἀπαρτωρ (剛の者) といふことから

6. ソクラテス、話題転換とエウテュプローンの智慧の試しとを言ふ。

7. 対してヘルモゲネース、あと一つ「ヘルメース」についての説明を求める。クラテュロスのからかひもあれば。

8. ソクラテスの説明——

イ、「ロゴス」をめぐって何かである。「通訳」「伝令」「語りにおいて盗人的かつ詐術的」「商売的」といったすべての仕事は「ロゴス」の能力についてであるから。

ロ、 「話(ことば)」(eipeu) を「発明した」(eipuro) は Eipeuro である。 Eipuro がその美称

9. ヘルモゲネースのクラテュロスのからかひの納得——自分はロゴスのよき工夫者ではない(口下手だ)

第二十四章 「パーン」「太陽」「月」「月」「星々」

1. 「パーン」について——

イ、ヘルメースの二つの姿勢持つ息子である。

ロ、その理由——ロゴスはすべてをしるしし、動き回り、うろつき、真偽の二重のあり方をする

ハ、二重のあり方——真実なものは滑らかで神々しく上方は神々の中に住まひする。他方、虚偽なるものは下方は人間どもの中の多数の中に住まひし、ぎざぎざし、山羊的である。すなはち、ここにこそ大多数の物語と諸々の虚偽なるものは存するのである、山羊的な生をめぐって。

ニ、すなはち、すべて(παν)を表し常にうろつく(αιπολαν)ものは「牧者パーン」(Παν αμνολογ)にしてヘルメースの二重の息子であり、一方上方からは滑らかで他方下方からはぎざぎざしてゐて山羊的である。

ホ、「パーン」はロゴスであるかロゴスの兄弟である、ヘルメースの息子であれば。兄弟は似て当然である。

2. 「神々」からは離れようとの思ひの表明

3. 対してヘルモゲネース、自然でもある神々、太陽・月・星々・大地・アイトール・空気・火・水・季節・年をば語ることを持

ち出す。

4. 「太陽」について——

イ、一説——*ἥλιος* はドーリア語では *ἄλιος* だが、その昇ってゐる間に人間どもをば一つ所へと「集める」(*ἀλιέναι*) ことに即してロ、また一説——「大地をめぐるに常に曲がって (*ἐλάνειν*) 行くから

ハ、また一説——大地から生ずるもろもろを多彩にして行くことから、「多彩にする」ことと *ἀλιένειν* とは同一

5. 「月」について——

イ、「月」といふ名前はその意味からしてアナクサゴラスの「月はその光を太陽に受けてゐる」といふ説をその昔にすでに教へてゐた。さればアナクサゴラスも形無し

ロ、説明——*σελάς* (輝き) と *φάος* (光) とは同じもの、新しくかつ古く、常に月をめぐるはその光はある。太陽は月の回りを回って光を常に新しく投げかけるが、他方、古くて先月の光は留まらぬ。 「月」の *Σελανία* との呼び名もむしろ *Σελαννοειδέα* (光を新しいのと旧いのと常に持つ *Σελάς-νέον-εἰνού-δε*) であるべきだった。その短縮された形なのだ。

6. 「月」と「星々」について——「月は欠けること (*μεινόςθαι*) からすれば正しくは *μείνη* である。「星々」は「稲妻」(*ἀστέραι*) に因むが稲妻は眼を背ける (*ἀναστρέφειν*) から本当は *ἀναστρόπη* であるところだが *ἀστέραι* とされた。

7. 「火」と「水」といふ問題提出

8. ソクラテス、「火」の説明困難を訴へつつもその策を語り始める。

第二十五章 「火」「水」「空気」「アイトール」「大地」「季節」「年」「歳月」

1. 「火」と「水」の説明策——ギリシア語としての説明ではなく外国語としてむしろ探求すべきである。
2. 「空気」について——

イ、一説——大地殻の諸々を「持ち上げる」(αἰθεῖν) から

ロ、また一説——「常に流れる」(αἰθεῖν) から

ハ、「空気の流れ」(ἀντροπρῶν) から

3. 「アイトール」について——「常に走る空気の周りを」(αἰθεράρα)
4. 「大地」について——「大地」は γῆ よりは γαῖα (産む母) だとホメーロスはしてをり、γενεάντων (彼らは生まれた) といふ言葉も持つ。
5. 「季節」について——季節は冬・夏・風・農産物を定めるからして「定めるもの」(ὀρίσασθαι) である。
6. 「年」と「歳月」について——「自己自身の内部で調べるもの」(ἐν ἑαυτοῦ ἐτάλλον) を二分し、それぞれとなった。

第二十六章 「思慮」「認識」「知」「節制」「知識」「理解」「智慧」「善きもの」

1. ヘルモゲネース、「徳」をめぐるの名前、思慮・理解・正義などを問ふ。

2. ソクラテス、古の名前の制定者たちが存在探求の末に起こした眩暈を自分のそれではなく事柄のそれだとしたことを指摘する。そしてその態度が「徳」に関する名前に見られることを言ふ。

イ、「思慮」の場合——一説に「運ばれと流れとの知 (φώρας ποῦ νόησις)」、「或いはまた一説に「運ばれの利益 (φωρακόνησις)」、「認識」について——「生成の観察 (γένεως νόησις)」からである。

ハ、「知」(νόησις) について——「新しいもの 狙ひ (νέου ἐστὶς)」からである。

ニ、「節制」について——「思慮の保全 (σωτηρία φρονήσις)」からである。

ホ、「知識」について——事物が運ばれて行くのに「然るべき魂が後に続いて (επομένῃ)、遅れも先走りもしない」といふことを表す。πιστεῖ μένεν (信頼に適ふ 留まる) = πιστήμη

ヘ、「理解」について——一説に「推論」(συναγωγισμός) と同義とする。また一説に「ともに行く」(συνεῖναι) と理解をすれ

ば「知識」と同じく「魂が事柄とともに進む」の意味

ト、「智慧」について——ἐπιθῆσθε ἐπαφῇ (突進した 素早い運動 接触) である。

チ、「善きもの」について——「速いものの中の噴賞すべきもの」(ἀγαστῶν θοῶν)

第二十七章 「正義」と「正しいもの」

1. 「正義」について——「正しいものの理解」(δικαίων συνείσις) である。だが、それなら

プラトン『クラテュロス』(内容梗概) (水崎)

2. 「正しいもの」とは何か？

イ、一説——「他のすべてのものどもを貫通しつつ (diaton) 養ふ」といふところから (万有流転の立場において)

ロ、「他のものを養ってそれに原因となるもの」とは何であるかの問ひに答へる一説——「太陽」は存在するもの間を行き (diaton)、熱しながら (katan)、養ふから。

ハ、「原因となるもの」のまた一説——「火」である。

ニ、同じく一説——「熱」である。

ホ、一説——「知性」である。

3. ヘルモゲネース、ソクラテスが諸説の存在に困惑してゐることを言ふのに、ソクラテスの即興ではなく伝聞だからだと批評する。

第二十八章 「不正」「勇氣」「男性的」「男」「女」「女性的」「乳房」「発芽する」「技術」

1. 「不正」について——貫通して行くものであるものの妨げとなるもの

2. 「勇氣」について——「正しいものに反して流れるものへの反対方向への流れ」(antipedia) である。

3. 「男性的」と「男」について——「上方への流れ」(anw pōn)

4. 「女」について——「産むこと」(yōn)

5. 「女性的」について——「乳房」(thaly) からである。

6. 「乳房」について——「発芽させる」(τεθνησκείν) から
7. 「発芽させる」について——「走る」と「跳ねる」(θεῖν ἀλλασθεῖν) から
8. 「技術」について——「知性の所有」(ἐξέλιπον) その際、τ を除去し、ο を二箇所に挿入して
10. 名前を制定する際の文字の除去・挿入といふ手続手管のこと、例——「鏡」κἀτοτρον は本来的には κἀτοτρον たるべし。「スフィンクス」Σφινξ は φξ たるべし。

11. ソクラテスのさうしたあり方への批評——名前が対応を失ひ安易に作られる。中庸と尤もらしさが必要である。

第二十九章 「仕掛け」「悪徳」「臆病」「徳」「悪い」「醜い」「美しい」

1. 「仕掛け」について——「多くのものに向かって達成する」(ἀνεῖν ἐπὶ πολλῷ) πολλῷ=μῆκος 故に、μῆκος ἀνεῖν
 2. 「悪徳」について——「悪しく行くもの」κακῶς ἰόν が魂に向かった場合である。
 3. 「臆病」について——「魂の余りもの最大の顛末」δεισιμῶς ἵαν
 4. 「徳」について——
- イ、一説——「邪魔なく支障なく流れるもの」δοχεῖται ἀκολούθως ῥεόν, ἀειπέτην
 ロ、また一説——右の「常の流れ」は「選ばれるべきもの」αἰπετή だとされて
5. 「悪」について——外国語起源のものである。

プラトン『クラテュロス』(内容梗概) (水崎)

一一二九

6. 「醜」について——「常に流れを抑へるもの」*ἀειλόγων τὸν ποταμὸν* の短縮形である。
7. 「美」について——
 - イ、「思考」の因み名である。
 - ロ、存在するものどもの各々にとってそれが呼ばれることの「原因をなすもの」は「名前を立てた者」であり、それはすなはち「思考」である。
 - ハ、「名前を呼んだ者」と「名前を呼ぶ者」とは同じそれ「思考」である。
 - ニ、「知性」と「思考」とが作り出すものは賞賛に値ひするものである。
 - ホ、一つの類比——「諸々の医術的な所産」対「医術的な働き」|| 「諸々の建築術的な所産」対「建築術的な働き」|| 「美」対「諸々の美しい所産」、そしてハとニから「思考」こそ「美」であり、「美」なる因み名は諸々の美なるものどもを作り出す思慮こそのものである。

第三十章 「裨益するもの」「得なもの」「引き合ふもの」「助かるもの」

1. 「裨益するもの」*συνφέρον* について——「魂の諸々の事柄ととも運ばれ」であり「一緒にめぐり運ばれること」*συνπεριφέρεσθαι* からかうしたものによってなされる事柄どもが「ためになるもの」「ため」と呼ばれるに至った。
2. 「得なもの」*κερδαλέον* について——「得」は *κέρδος* だがその *κέρδος* = *κέρδος* ばかり、その *κέρδος* は「混じる」*κεράννεται*

といふ「善」のあり方を表現してゐる。πとσとの入れ替へ

3. 「引き合ふもの」 *λυοττελουν* についで——「運ばれからその終止を解き放つもの」 *λυοντελος*
4. 「助かるもの」 *ωφελιμον* ければ「増やす」 *οφελιεν* である。

第三十一章 「裨益しない」「助けとならない」「引き合はない」「有害な」「損をする」

1. 「裨益しない」「助けとならない」「引き合はない」など否定形 (*Αντιμφορον, ανωφελες, ανωφελεις*) は検討不要
2. 「有害な」 *βαρβερων* についで——「流れを固定せんとするもの」 *βουλομενον αττειν ροην* である。但し、今「流れを妨げる」 *βαττων τον ροην, βουλομενον αττειν* の連想で、そして粉飾
3. ヘルモゲネースのソクラテスの説明の多彩の批評
4. 「損な」 *ζημιωδες* についで——

イ、文字の付加や除去による名前の思考の変容といふことの指摘、僅かの変更による意味の正反対化

ロ、その事情の「なすべき」 *δεον* を例にとつての説明へ——現今の新しく美しい言語は反対に引っくり返しては「なすべきもの」と「損な」とを表すやうにしてゐるが、その際にその言葉の意味するところを隠蔽してゐるのである。だが他方、昔の言語は名前の意味する両方を明らかにしてゐるのである。

ハ、その説明——昔のπとσとの現今のεとυへの代替といふこと存在

ニ、その例——昔の「日」*hēmera*が今は *hēmera'* *hēmera* の意味は「待ち望む者たちにとって」*hēmerousin* のもの、今の *hēmera* は意味不明か「温和な」*hēmera* とする珍説か。

ホ、同じく例——今の「頸木」*kyōn* とむかしの *kyōn* 後者は「二匹に対して引、張る」*kyōn arōnēn* を語る。

ト、もともとの例の「なすべきもの」*deon* へと帰って——「善」をめぐるすべての名前にとつての反対のしるし、何故なら、本来は「善きもの」の姿であるのに「なすべきもの」*deon* は運ばれの「絆」「障害物」として現れる。

- チ、昔の名前に即して——「なすべきもの」*deon* は *diōn* (貫通するもの) といふ「善きもの」をこそ表してゐた。それ故、ここには自己矛盾はない。「なすべきもの」「助けとなるもの」「引き合ふもの」「得なもの」「善きもの」「神益するもの」「遣り易い」は同じものと現れる。「すべからず秩序づけるもの」「行くもの」の称揚、「抑制をするもの」と「束縛するもの」の非難
5. 「損なもの」についで——「行くものを束縛するもの」*deon to iōn* として解される。但しこゝらへの変更

第三十二章 「快」「苦痛」「悲しみ」「痛み」「苦しみ」「悩み」「喜び」「心地よき」「愉快」「欲求」「テュモス」「欲望」「憧れ」「恋」

「思惑」「随意的」「必然」

1. 「快」*hōnē* に ついで——「享受に向かつて張つてゐる行為」*hōnēis hē praxēs hōnē* から *hōnē* へ
2. 「苦痛」*lytēnē* に ついで——*apōlytēnē* へ *hōnē*
3. 「悲しみ」*ānā* に ついで——「行くことの妨げ」*a* (否定) へ *lēvan*

4. 「痛み」 ἀλγηδῶν について——「痛む」 ἀλγεῖν から
5. 「苦しみ」 ὀδύνη について——「深く入りこむ」 ἐνδύσει から
6. 「悩み」 ἀχθηδῶν について——「運ばれ の 重荷」への名づけ
7. 「喜び」 χαρά について——四方への注¹⁰ διάχυσις
8. 「心地」 ἡσυχία 「静けさ」 τεπής について——「這ふ」と「息」 ἐρπής πνοή=εἴπνοον
9. 「愉快」 εὐφροσύνη について——「魂」が事柄に対してともによへ運ばれること εὐ συμφύερασθαι または εὐ εὐφροσύνη によるもの
10. 「欲求」 ἐπιθυμία について——「テュモスの方へと行く力」 ἐπι τὸν θυμὸν ἰούσα
11. 「テュモス」 θυμός について——「魂の荒れ狂ひ」 θυσία から
12. 「欲望」 ἡμερος について——「流れが突進しつつかつ事柄を欲しつゝ流れて、かくて魂を流れの希求によって強く引きつける」
ἡμέρας ἐφείμενος βεῖ
13. 「憧れ」 πόθος について——それが現在するものではなく「何処か他の場所に離れてあるもの」 (ἀλλοθί που ὄντας καὶ ἀπόντας) それで φέρω
14. 「恋」 ἐρωδ について——「流れ込む」 ἐρπεῖν から ἐσρος と流れ、ἐρωδ と現在はなった。
15. 「思惑」 δόξα について——
イ、一説——「追ひ求め」 δικάσις

ロ、また一説——「弓の発射」 *τάξον βολή=οίησις* (思ひ) = 「魂」の「事柄」へと向かつての *οίησις* (動意)
 ハ、ロの類例——「意志」 *βουλή* が *βολή* 「意志する」を意味し、*βούλευσθαι* が「狙ふこと」*ἐπίσκοπαι* 「熟考する」も然り、すべ
 ては「射ること」

ニ、ハの反対の場合も同様たること——「考へるなや」*ἀβουλία* は「当たらぬ」*οὐ βάλων* である。

16. 「随意的」*ἐκούστων* について——「行くものに譲歩する」*εἰκονίστην*

17. 「必然的な」*ἀναγκάων* について——「谷間を通つての歩行」*διὰ τοῦ ἀγκυρῶς τοπέια* である。

第三十三章 「名前」「真理」「虚偽」「あるもの」「あり」「あらぬもの」、「要素的な名前」それ自身の正しさ

1. ヘルモゲネース、ソクラテスがエウテュプロンの靈感の力を抛っておかぬやうに勉めるのに応じて、なほ問ひを続ける。すな
 はち、「真理」「虚偽」「あるもの」「名前」の名前の正しさとは何なのか、と。

2. 「名前」について——

イ、一説——「探求されるものがそれのであるそのあるもの」*ὄν, οὐ τὸν κἀνεὶ ἕτηνια* とつふ語りからである。

ロ、また一説——「名前」*ὄνομα* を *ὀνομαστόν* (名づけられるべきもの) といふふうにならぬに形を変へてみると、一層よくこの間の事
 情は認識されよう。すなはち、「探求」の語りは *ὄν οὐ μάταια* ともならぬから。

3. 「真理」について——「あるものの神的な運ばれ」がその名前で呼び習はされてゐるのであり、「真理」*ἀλήθεια* は「神的な訪

徨む」*theia dān* として理解される。

4. 「虚偽」*psēdos* について——「運ばれ」の反対、抑制し静止を強ひるものが非難されて「眠ってゐるもの」に喩へられ、*ε*が附加されて名前の意図が覆はれてしまった。

5. 「あるもの」と「あり」*ōv* と *ovata* について——「真理」と一致し「行くもの」*ivō* である。¹を取り戻す。「あらぬもの」*ōvōv* もまた「行かぬもの」*ōvōv ivōv* である。

6. ヘルモゲネース、「行くもの」「流れるもの」「縛るもの」(*ivō, βion, dōvō*) は、だがそもそもどうなのかと問ふ。

7. ソクラテスの回答(その一)——「外国語起源のものである」との回答が適当である。何故なら——

イ、事実上もさうである。

ロ、最初の名前は如何にも古代的で幾重にも捻じ曲げられてをり、外国語にも等しい。

8. ソクラテスの回答(その二)——

イ、7の説明も口実にも過ぎまい。

ロ、「名前の正しさ」を説明するためにその説明の「要素」ともなるものは、これを無限に問ふわけには行かぬ。

ハ、「問ひがストップすべきところ」とは「それが他の合成に対してその要素とはなるとしても、しかしそれ自身は最早如何なるものからも合成されることがないものへと至ったところ」であらう。そこでは、最早、還元は不可能

ニ、されば「行くもの」「流れるもの」「縛るもの」といふ名前は要素であって、それらの名前の正しさの何であるかは「要素を合成した語り」といった仕方以外の仕方に拠らねばならない。

ホ、最初の名前の正しさをこれから語るであらう。

第三十四章 「最初の名前の正しさ」の問ひへ

1. 一つの確認と再確認と――

イ、確認――すべての名前の正しさは、最初のそれもより後のもののそれも、とまれ一つの或るものなのであり、それらの名前の如何なるものも名前であることによっては相違はしないこと

ロ、再確認――これまでの検討してきた名前の正しさとは「ある」されるものどもの各々が如何にあるかを明らかにするやうなものだった。

ハ、推論――右のイからして、これから検討すべき最初の名前の正しさもまた口の線上で考へらるべし。

2. 「最初の名前の正しさ」の「一つの見当」――

イ、ゼステュア、身振り、身体言語によるしるしづけ――「事柄の本性の摸倣をして」ものを明らかにすることのあること。明らかにしたいと欲したものを身体が摸倣して、そこで身体の表現 (*Le Yvimi*) が生じたのだった。

ロ、目下のしるしづけの実際において――声・舌・口によってこそものを明らかにすることは行はれ、「摸倣物」は何についてであれそれらを通じてこそ生じてゐて、その場合において、各々のものを「明らかにするもの」は我々にとって存在するであらう。それ故――

ハ、「名前」の定義——「名前」はそれが真似るものの声によってする摸倣物であり、真似をする人は声によって彼が真似てゐるものを名づけてゐるのである。

3. ソクラテスの疑問——「真似」は単にそのまま「名づけ」だと言へるか？

4. ソクラテスの認識（その一）——

イ、それだと動物どもの鳴き声を真似してをればそれでそのまま名づけてまでゐることにもならう。

ロ、音楽の技でもって事柄を摸倣してゐても名づけてはゐない。但し、声でもってその時もまた摸倣してはゐる。

ハ、次いでまだまだ名づけではない摸倣のこと——音楽術が摸倣するものどもを我々もまた摸倣する場合、理由——音楽術と絵画（術とはものの音・形・色とを摸倣してこそそれぞれに技術なのではあるが、しかしそれらの摸倣をめぐって名づけの技術はあ
るのではない。それらの摸倣は「音」の摸倣は音楽術、「形・色」のそれは絵画術

5. ソクラテスの認識（その二）——

イ、各々のものには「色」「形」「音」があるやうに、その「あり」もまたある。すなはち——

ロ、「色」「音」などの両者にとつてもその他「である」といふことの呼称に備ひする限りのものどもにとつても、あるのである、
或る「あり」こそが。されば——

ハ、もし或る人がまさにそのもの、すなはち「あり」を各々のものそれだとして文字と音節とでもって摸倣することが出来る
ならば、彼は各々のものを何であるか明らかにしてゐるであらう。

ニ、結論——「音」の摸倣者は音楽家、「色・形」の摸倣者は絵かき、だが「あり」の摸倣者は命名家

第三十五章 要素的な名前の「あり」の摸倣は如何に

1. 問答の課題が今やそこへと収斂したところの確認——一方で「要素的な名前」(流れ・行く・抑止 *poj, levan, oxéaric*) の正しさが問はれ、そして他方でそれらの正しさとは「あり」の摸倣であったからには、「あり」を命名するといふことがその仕事であった命名家ははたしてよくその摸倣を行ってゐるかどうか、その点の検討が問題である。

2. 右の検討へと向かふために必要な準備的考察(その一)——

イ、「要素的な名前」の定量的考察、それはどれだけあるのか。

ロ、そこからして摸倣家が摸倣することを始めるその「分割の仕方」はどうか。(摸倣の出発点は分割)

3. 同右(その二)——

イ、摸倣手段についての分割——「あり」の摸倣は音節と文字とによってこそ行はれるからには、第一には諸々の「字母」が分割されるべきである。(諸々のリュトモスを手がける人々も第一には字母の力を、次いで音節の力をといふ遣り方をする)

ロ、母音(有声音)——子音(無声無音)——半母音(非母音・非子音)——母音そのものの種別

ハ、摸倣対象についての分割——今度はそれらに対してこそ名前を立てるべきすべてをよく分割すること、その中へとすべてが還元されるかどうか要素的なものもろもろといったものがはたしてあるのかどうか。

ニ、ハの分割の目的——それら要素からこそ、一つは「ある」とされるものどもを見ることが、またそれらの中に諸々の種類が

あるのかどうか（ちょうど字母においてあったやうに）、これを同じ仕方で見るとためである。

4. 同右（その三）——分割された字母の分割された対象へのもたらし

イ、字母の各々を類似性に即して（あるものへと）もたらすもたらし方を知識すること

ロ、もたらすその仕方の多様性について——或る場合は「一つの字母を一つのものに」、或る場合は「多くの字母を混合して一つのものに」とそのもたらしはなるだらう。そして後者の場合、字母の混合はそこに「音節（綴り）」「名前」「述べ言葉」「語り」（オノマ・レーマ・ロゴス）をももたらさう。

5. 4 について必要な注意 ——

イ、それらの「混合」とそれによる「合成」とは古人の仕事であったこと、我々のではないこと

ロ、我々の仕事は分割と「最初の名前」「後からの名前」の遣り方に即したありの如何の観察とである。

第三十六章 目下の課題を前にしてのソクラテスの自意識

1. 前章で見た「字母」と「対象」の分割といふ総じての目下の課題を前にして自らを省みる（その一）——

イ、身に余る仕事だから手を出さずに止めてしまふ。

ロ、我々に可能な仕方ではほんの僅かを見得るだけでも試みる。

ハ、「神々」については人間どもの思惑を推量するのみと断った如く、「分割」の問題もまた我々の力に適はう仕方ではなすしかない

であらう。

2. 同右(その二)——ソクラテスとしてのかかる問題についての総じての認識

イ、諸々の文字と音節(綴り)とで事柄が摸倣されて明らかなものとなって行くとは笑止千万ではあらうけれども、それは必然なのだ。これこそが最上の説だったのだ。

ロ、神授説の可能性の存在

ハ、異民族からの導入の説の可能性

ニ、それらの「名前」の古さの故に考察不可能とする可能性

ホ、だが、ロハニは逃げ口上だらう。

へ、「最初の名前」の正しさこそは「後の名前のそれ」を説明するもの。後者の識者は先づ前者のそれたるべし。

3. ソクラテス、自らが「最初の名前」について感じてあるところを提出する意志を言ふ。

第三十七章 諸々の字母の「あり」の摸倣の力の分割について

1. 「ロー」*ρ*に ρ がついて——

イ、すべての「動」の道具である。

ロ、「動」とは——「行く」*leōu*なのだがそれが外国語たる *leu* (= *leuan* 行く) と *e* の ρ との交換と ρ の挿入からである。

ハ、 「静止」στῆσις は「行く」の否定 ἀίσις がめかされてなつた。

ニ、 ρ が「動」の横写のための格好の道具であると名前を立てたものが思った証拠——「流れる」ρέν「流れ」ρῆ「震く」
ῥῆσις 「荒くれた」ῥαχύν「叩く」κρούεν「砕く」θραύεν「裂く」ερείκειν「粉碎する」θρύπτειν「寸断する」κερ-
ματίζειν「旋回する」ρῦμβεν「ρ」の発音には舌が最も振動する。

2. 「イオータ」について——すべての微細なものに向けて、それらこそはすべてを貫通する。証拠——「行くこと」「急ぐこと」
ἵεναι ἵεσθαι

3. 「ピ・プシー・シークマ・ゼータ」φ ψ ζ η について——これらは気息的だからすべて気息的なもの名づけに用ゐられる。
証拠——「冷たい」「沸き立つ」「揺れる」「振動」一般 (ψυχρόν, ζέον, σείεσθαι, σεισμός)

4. 「デルタとタウ」δ, τ について——発音には舌を押し付ける字母だから「束縛」と「静止」δεσμός, στάσις の摸倣

5. 「ラムダ」λ について——発音の際に舌がよく滑るから、^ハ「つるつるしたもの」「滑ること」「油のある」「膠質の」λεία,
όλισθίεναι, λιπαρόν, κολλώδες の横写に用ゐる。

6. 「ガムとラムダ」γ, λ について——「ガムマ」は引止め「ラムダ」は滑るから、「粘り気のあるもの」「甘いもの」「ネバネバ
するもの」γλισχροί, γλίβεύ, γλιωάδες の横写のために

7. 「ニュー」ν について——発音は内部的、故に「内にあるもの」と「中にあるもの」ένδον, εντός に横写すべく名前とした。

8. 「アルパ」と「エータ」α, η について——両字母は大きいので、前者を「大きいもの」に後者を「長いもの」に宛がった。

9. 「オウ」ο について——丸いものしるし

10. 総括しながら——各字母を類似性に即して各対象に当てはめてその文字・音節（綴り）としながら、各々「あり」のしるしとした。そしてそれら要素的な名前を用ゐてその後の名前を合成した。以上。

第三十八章 今や再びクラテュロスを交へての「名前の正しさ」の議論となる。

1. ヘルモゲネース、ソクラテスの以上の「名前の正しさ」の議論を受け、今やクラテュロスのそれは如何と問ふ。

イ、クラテュロスの「名前の正しさ」に関する不明確は故意なのか、それとも不本意なのかの不明

ロ、ソクラテス説への同意か、それとも自説の主張か

2. クラテュロスの問題の重要性に鑑みての躊躇ひの表明に対して残る二人の言ひ分——

イ、ヘルモゲネース——問題の重要性を承認するもクラテュロスからの寄与も要求する。

ロ、ソクラテス——自説に固執するつもりでないこと、クラテュロス説に期待してゐることを言ふ。

3. クラテュロス、ソクラテスの言葉を受けて——ソクラテスがクラテュロスの弟子になるといふよりもむしろその反対であらうといふ感触をソクラテスの説には感じたこと、エウテュプロンの靈感なのかとも言ふ。

4. ソクラテス、「靈感なのか」とのクラテュロスの思ひを受けて——

イ、自らの智慧の信じ難さと自分で自分を欺く危険を言ふ。

ロ、語ったことの吟味の必要を言ふ。

ハ、語ったことの要点として「名前の正しさとは事柄のあり方を示すものである」といふことがあったとして問ふ。

5. 一つの推論――

イ、「事柄のあり方を示す」とは「名前が教示のためにこそ語られてゐるのだ」といふこと

ロ、教示もまた一つの技術であり、故にその制作者が存在すること、すなはち「立法家」

ハ、「教示の制作」たる技術の発生の仕方は他の技術の場合と類比的か？ 他の技術の場合に上手・下手がある。

6. クラテュロスによる類比性の否定、すべての法律にその良し悪しはなし。名前も然り。すべての名前は名前であるその限りは正しい。

7. 「ヘルモゲネース」なる名前の問題をクラテュロスは語る――

イ、その名前は人物ヘルモゲネースに対しては付けられてさへしない。その本性を持つ別人のものである。

ロ、人物ヘルモゲネースを「ヘルモゲネース」の名前で呼ぶことは、そもそもその名前に相応しい「あり」を彼が持たぬのであれば、さう主張は出来ない。そもそも主張さへ出来ぬならば主張に伴ふべき虚偽の可能性もない。

ハ、語ってゐるのであれば「あるもの」こそを語ってゐるのである。

ニ、虚偽をかたることはおろか、虚偽を主張することも存在しない。

ホ、「話すこと」「話かけること」もない。「ヘルモゲネースよ」といふ人物ヘルモゲネースへの呼びかけといふのもただ空しく声を出してゐるのみ

1. 「虚偽可能・虚偽不可能」の齟齬を和解へ変へるために先づ同意し合ふ——

イ、「名前」と「名前がそれのだといふそのもの」（名前をつけられるもの）との別

ロ、「名前」は「事柄」の或る摸倣物たること（絵画もまた或る摸倣物）

2. 「配分する」といふこと——

イ、「名前」と絵画といふ二つの模造品についてそれらをそれらがそれらの模造品であるところの「事柄」へと配分し結びつけるといふことが存在する。

ロ、男の肖像画を男に、女の肖像画を女に配分する場合、男の肖像画を女に、女の肖像画を男に配分する場合

ハ、二つ場合において一つだけがまっすぐである。

ニ、「配分がまっすぐだ」とは各々にとって相応しくかつ似てゐるものを与へ返してゐること

3. 2に見た「配分」の二つのあり方を「絵画」と「名前」とについて定義する——

イ、「絵画」の場合——相応しいものの配分はまっすぐである（正しい）。

ロ、「名前」の場合——相応しいものの配分はまっすぐであり（正しく）かつ真実である。

ハ、似てはゐないものを配分した場合は、「絵画」についてはまっすぐではない、「名前」についてはそれに加へて虚偽の配分だともする。

4. クラテュロスのクラテュロスの異論——「名前」の配分にはまっすぐではない配分といふものではなく、否、常にまっすぐ配分するのではないか。

5. ソクラテスの検討「名前」の配分と「絵画」のそれとの相違とは？　むしろ、同様なのではないか——

イ、「絵画」の場合に本人の眼前に、或いは本人その人（男）の肖像画を、或いは別の人（女）の肖像画を、示すといふことがある。

ロ、「名前」の場合、本人の耳元で、或いは本人その人（男）の名前を、或いは別の人（女）の名前を言ふといふことがある。

6. 次いでクラテュロスの5の容認に立って、ソクラテスは続ける——

イ、ことはさうあるのであり、争ひの余地はなしとする。

ロ、3のロを再確認する。

ハ、「名前」に関するまっすぐならざる配分、相応しからざる与へ返しの存在は、「述べ言葉」と「語り」に関してもまた同様の配分や与へ返しのあらうことを示唆する。但し、「語り」は名前と延べ言葉との組織レギュラリゼーションである。

7. 「絵画」の比喩の限りで「名前」を論じて見て——

イ、「絵画」が相応しい色や形をすべて与へ返すこと、除去或いは付加をすること、かうしたことがあれば、「名前」の方もまた然り。

ロ、「絵画」において、与へ返しがすべて相応しきでなされてこそよき絵画、除去や付加を伴へば拙劣な絵画、かう考へられるやうに、類比的に「名前」においてもさう考へられる。

ハ、「名前の制定者」は「立法家」でもあれば、その「立法家」はよき或いは悪しきそれとされよう。

8. クラテュロス、「名前」における除去や付加は「間違つた名前の制定」をではなく、端的に「名前の不成立」こそを物語るのだとする。

9. ソクラテス、右の8を受けて「名前」の「絵画」による比喩の思考と決別することを示唆する。

イ、「数」からある・あらぬが必然である限りのものども——除去・付加によるそれであることの喪失或いは不成立

ロ、「どのやうがある或るもの・すべて似せたものたるもの」は、それに似せるそのものの如何にかんしては全くのとりすべてを与へてはならない、「似せもの」たらんとすれば。

ハ、クラテュロス本人の持つすべての要素を持つものはクラテュロスそのものである。

第四十章 「名前のテュポス(型)」といふ認識の問題

1. 確認——「似せたもの」と「諸々の名前」の正しさは(要素のすべてを与へる場合の正しさとは)別ものである。

2. 帰謬法による右の確認への理由付け——もしもさうすればそれはただ本物をのみとなり区別がなくなってしまう。

3. 確認からの結論、「テュポス」(型)としての名前たるべしといふこと——

イ、「名前」が似せものである場合、要素の与へ返しは様々であつてよく、相応しからざる文字をも与へ返すこと

ロ、「事柄と文字との間での文字の非相似は、語りにおいて非相似の名前を」「非相似の名前のもたらしは、非相似な語りを語り

においてもたらすことを「承認すべきであり、それでも何ら劣るとなく「事柄」は名づけられかつ語られる、「それについて語りがある事柄」そのテュポス」がその内にある限りは。PrataもPrataが余計に付加されてはゐるが、しかしそこにそれがgであるその「テュポス」はある。すなはち――

ハ、「テュポス」が内在してゐれば、よしすべての相応しいものを持つことがないとしても、「事柄」は語られる。

ニ、この結論への到達には必要以上に遅れまじきこと

ホ、「名前の正しさ」の別解を考へるとそれは「音節と文字による事柄の明示」といふもの以外たるべし。

4. 以上、右の123の同意に立って、次の考察へ――

イ、「名前」が見事に付けられてあらんがためには「名前」は相応しい文字を持つべきである。

ロ、「相応しい」＝「似てゐる」

ハ、「見事な名前」＝「相応しく似てゐる文字による名前」、「見事ならざる名前」＝「大部分の相応しくて似てゐる文字と一部の然らざる文字からなる名前」

5. 異論と解決――

イ、クラテュロスの異論――見事ならざる「名前」は最早それとして容認されてはならず、その不成立なのだ。

ロ、ソクラテスの解決――同意された如く「名前は事柄を明らかにするもの」「名前には最初のもの・より後のものがある」「最初の名前は摸倣にこそよる」であったことの再確認の要求

ハ、「名前の正しさ」のヘルモゲネースその他の「取り決め説」をプリファーする可能性はあるのか？

ニ、「取り決め説」より「自然本来の相似説」こそ

6. 「名前の事柄への相似」を保証する者——

イ、「名前」の「事柄」への相似とは必然的に「字母が事柄に相似であること」をば意味し、それらの字母からこそ最初の名前を人は組織するのである。

ロ、「肖像画」が本人に似てゐるのも似せて描く場合に組織しつつ用ゐる絵の具が本来的に相似である必要がある。

ハ、ロとの類比——「名前」がそれらからこそ組織される諸々の字母の「事柄」との或る相似の、先づもってする相似の存在

第四十一章 「慣用」そして「取り決め」といふ名前の正しさの問題へ

1. 「名前の構成要素（字母）」の名づけられるものどもへの相似といふことの前章末の確認を例示して——

イ、「ロー」の運ばれと動と硬さとへの相似

ロ、「ラブダ」の滑らかなもの・柔らかなもの等々への相似

2. そして一つの事実の確認——「同一のもの」においてアテナイ人らは *σκληρότης* を言ひエレクトリア人らは *σκληρότις* を言ふのだといふこと

3. その場合にそこにあることの分析——

イ、双方の名前の末尾の字母はそれぞれ *ς* と *τις* であり異なつてゐるが、それらは「同じもの」に似てゐて双方に等しく同一のも

のを明らかにしてゐる。

ロ、その場合、^δも^ρも「運ばれ」を明らかにする者であることで類似することこそ然りである。

ハ、双方の名前の中間の字母たる^νに關してはどうか——「字母のものへの相似」といふことだけを徹底的に守るべきならば、^νは「軟さ」をこそ明らかにすべき字母なのだからその点で正しい字母ではなく、正しくは^ρに置き換へられねばならぬとも言ふべきかと考へられよう。

4. 「名前を構成する字母のものへの相似の不徹底」といふ事実を「名前の正しさ」の問題として理解すべき道筋たるの「取り決め」(シュンテーケー)といふことの思索へ(その一)——

イ、正しくないだらう字母^νをその中に持つ *σκλινγον* は語り合ふ人々を相互に理解させ得ないのかどうかといふ問題

ロ、クラテュロスによるあるべき回答の回答——我々は相互に学び合ふ。とまれ慣用により。

ハ、ソクラテスの「慣用(エトス)の分析——それは「取り決め」(シュンテーケー)であり、つまり「よしんば、不適切な字母たる^νを含む名前をも名前として声に出してをっても、その場合、声に出してゐる者は心の中には名づけられた彼のものを思つてをり、他方それを聴く者の方は、声に出してゐる者は彼のものをこそ心の中では思つてゐるのだと認識してゐる」といふことである。

ニ、「かく聴く者に認識がある」とはそこには「明らかにするもの」があるといふことである。

5. 同右(その二)——

イ、「明らかにするもの」が「彼のもの」(名づけられるべきもの)には相似しない字母までも含むものであるとは「そこに成

立してゐる理解のその中には理解する本人自身による取り決めがあった」といふことである。

ロ、よし「慣用」取り決め」が否定されても「相似」明らかにするもの」では決してない。むしろ「相似」慣用」である。理由——「慣用」こそは字母のものとの相似・非相似にも拘らずものを明らかにする。

ハ、「数」こそは「同意と取り決め」こそが名前の正しさであることを最も証明するだらう。そこにはどんな「相似」をも我々は見出すことはない。(数は量的に多様なあり方を示しても質的にはどんなあり方の相違をも示さない)

ニ、「名前」と「名づけられるもの」との程々の相似といふこと

6. 再出発——名前の能力と名前の達成とは何であるのか？

第四十二章 名前の能力を問ふて

1. クラテュロス、ソクラテスの右の設問に答へる——

イ、名前の能力は「教へること」である。

ロ、名前を知る者は、すなはち事柄をも知る者である。

2. ソクラテス、右のクラテュロスの回答の意味するところを分析する——

イ、「名前を知る」とは、名前は事柄さながらのものなのだから、また「事柄」をも知る。

ロ、理由——「事柄」は「名前」に似てをり、相互に似てゐるものの技術は一つである。

3. ソクラテス、「ある」とされるものどもの教示の仕方について問題にする——

イ、他にも教示の仕方はあるが名前による教示の仕方がより優れてゐるのか。

ロ、教示はただ一つの名前による仕方のみであるのか。

4. ソクラテス、右の問題に対しクラテュロスが後者（教示はただ名前による仕方のみ）と答へるのに、また問ふ——

イ、「ある」とされるものどもの発見も同じ仕方であり「諸々の名前の発見者」は名づけられた事柄の発見者でもあるのか。それとも

ロ、「探求と発見」とは別の仕方にこそ拠るが、しかし他方「学び」は名前による仕方に拠るのか。

5. クラテュロスの回答——「探求すること」も「発見すること」も同じその仕方こそ、同一のものどもに即して！

6. ソクラテスの疑問——

イ、「事柄」をこそ探求しつつ諸々の名前について行き、その際、如何なることを各々の名前が意味するのかを考察するとしたら欺かれる少なからざる危険があらう。

ロ、最初の者として諸々の名前を立てた者は明らかに「事柄がどのやうなものとしてあるか、そのやうなものだとこそ信じたところ」これをまた諸々の名前として立てたのだった。

ハ、諸々の名前の最初の制定者が事柄のあり方を完全に信じ得ない可能性、すなはち「欺かれる」可能性

7. クラテュロス、対して自説を主張する——

イ、「名前を立てる者」は知った上で立てること、然らざれば「立てたもの」は名前ですらない。

ロ、右の証拠——一つの帰謬法、すなはち「名前を制定する者」が真実から挫折させられることはなかった。何故なら、かくも整合的なものとして彼にはすべての名前があったから。(挫折してをれば、調和はなかった。然るに調和といふことが現実には紛れもなくある。それ故、挫折はしてゐない)

ハ、それはソクラテス自らが万有流転の認識に基づき諸々の名前の正しさの所以を語つてゐたそのことの謂ひでもある。

8. ソクラテス、右の「名前の全体調和」の主張に対して反論する——最初のもものを蹉跌しても他をそれへと向けて無理強ひし相互に調和するやう強制した場合には、残る多大のものも一致する。最初のもものを蹉跌とはちやうど諸々の図形の最初の僅かの不明瞭なものが時に間違つて生じたといった場合である。すべての事柄の出発点についてこそ考察が肝要、その吟味がなされてこそ残るものどもが最初の出発点にはつきりと続いて現れるのでなければならぬ。

9. 次いでソクラテス、「諸々の名前もまた自らが自らに調和するかどうか」についての驚きの思ひを言ふ——

イ、「もろもろの名前は事柄のありを、万有は行き・運ばれ・流れるものとしてこそ考へて、しるしてゐる」が我々の主張するところであつた。

ロ、以下、「諸々の事柄は留まつてゐる」との根本想定かとも見られる諸々の名前のあり方の逐一検討——知識・確固とした・探求・信じられるもの・記憶・誤謬・災難・無智・無節操

ハ、流転説の想定での名前と静止説の想定での名前とそれぞれにそれらの名前の正しさが主張されようとも、説の多寡で事柄の真理は明らかにはされない。

第四十三章 「ある」とされる諸々の事柄を事柄自身を通じて学び探求すること

1. ソクラテス、前章7でのクラテュロスの「名前を立てた者は事柄を知って立てた」といふ主張へ問答を引き戻す。
2. その際のクラテュロスの含審の確認——最初の名前を立てた者も然り。
3. 次いでソクラテス、クラテュロスが主張する知識の成立条件に関して問ふ——

イ、その知識が学習・発見の何れによるにせよ最初の名前が未だ成立してはゐない時のことだから、「名前を通じて知る」といふことはあり得るべくもなかった。然るに——

ロ、クラテュロスの主張するところでは学習・発見とは「名前の如何様にあるか」のそれらでこそあった。それ故に問ふ——
ハ、未だ名前なきその時の知識獲得の方法とは如何ぞ！

ニ、クラテュロスの回答——最初の名前を立てた存在は人間以上の力を持つものであり、それ故、それらの名前は正しい。
ホ、ソクラテスの疑問——最初の名前は一方に流転説に基づくもの他方に静止説に基づくものといふ矛盾を示してゐる。
ヘ、クラテュロスのそれに対する回答——矛盾する一方は名前ではない。

ト、ソクラテスの再反論——それでは両論の自己主張の争ひになるのみである。

4. 両者、妥当な結論へと達する——名前に拠らずに事柄の「あり」を表すものこそが「名前の正しさ」の判定者である。
5. ソクラテス、名前には拠らぬ名前の正しさの発見の方法について自らの思ふところを開陳する——
イ、それはそれが如何にもそれであるらしく思はれもし最も正しくもあるそれ以外のものを通じてではない。

ロ、もしも（真実なものどもが）何らかの仕方と同族的であるとすれば、相互を通じて、かつ自らが自らを通じてである。

ハ、「相互を通じて、かつ自らを通じてだ」とする理由——それら（真実なものども）から異なるものは別様の異なる何かをすなはち別物をするし付けし、それら（真実なものども）をするし付けしないうであらうから

6. 以上のすべてを集約してソクラテス、我々が一方に「名前の事柄との相似」を見ては他方に「事柄相互を通じた学び」を見るときしたら、どちらの学びがより美しくまたより明白であるのかを問ひ、後者だとの答へを得る。

7. 当面する問答からして総括的に——

イ、「ある」とされるものどもをどんな仕方ですべいかを認識してしまつてゐることは身に余る。

ロ、だがしかし、「ある」とされるものどもを、名前どもからではなく遥かに一層名前をそれら自身を通じてかつは学びかつは探求すべしとの同意こそは、よしとすべし。

第四十四章 アイデア論的な思索へ向かつて

1. ソクラテス、ここで「アイデア論」的な思索の可能性を示唆し始める——

イ、「万有流転説」による多数の名前が我々を欺くことへの警戒の必要

ロ、だが、事実は然らず、ただ最初の名前の制定者自身だけが渦巻きの中へと落ち込んで眼が眩み、我々をも巻き添へにしたのではないか。すなはち——

ハ、しばしばも夢見たこと——何か「美そのもの」「善そのもの」としてあり、また「ある」とされるものどもの各々がさうあ
るのだと主張したものでどうかといふこと。

ニ、考察の本格的な対象の主張——「何か顔」とかいったものが美しくあるものの流動するのだとは考察すまじきこと、「美その
もの」こそは、それがさうあるやうなさうしたものととしてこそ常にあるのだといふこと

2. 一つの帰謬法からの確認(その一)

イ、もしも(イデア的存在が)常に密かに抜け出てゆくとするれば、そのものを全うに呼びかけること、先づは彼のものであると、
次いでではさうしたものであると、かう呼びかけることは可能であるか。それとも我々が語る間にも別ものにそれはなつて消え
去り、最早さうしたあり方をしてはゐるのが必然か。後者である。されば——

ロ、決して同様のあり方をしないものは、何もかななどではあり得ない。何故なら——

ハ、もし何時か同様のあり方をしてあれば、ともかくもその時においては、明らかに何ら変化することはないから。だがしかし—
ニ、もしも常にそれが同様のあり方をして同一のものであれば、そのものは変化もせず動きもしない。それは自らの姿を放棄しな
いものである。

3. 同右(その二)——

イ、(常に変化し同一のあり方を保たないものについては)誰一人によつても認識されることすらない。何故なら——

ロ、そのものは認識しようとする者がそれに向かつて行くと同時に別もの・別様のものとなり、その結果はまた、最早どのやう
な何かであるとも如何にそのあり方をしてゐるかも認識されないだらうから。

ハ、認識は如何なるものも同様の仕方では決してあらぬものと認識するもの、これを認識するのではない。

4. 同右 (その三)

イ、(万有流転説からは) 認識さへも存在せずとなすべし。何故なら、まさにそのものが「認識たること」から変化することはしないとすれば認識は実に留まり認識であるだらうから。然るに——

ロ、もしも(認識といふ) まさにその形さへもが認識から変化して行くのだとすれば、それと同時にそれは認識とは別の形へと落ち込んで行き認識ではないことであるだらう。

ハ、常に変化するのであれば、常に認識ではあり得ず、この議論からすれば「認識せんとするものも認識されんとするものもあることはない」こともならう。すなはち、これに対して——

ニ、一方「認識する者」が存在し、他方「認識されるもの」が存在し、そして「美なるもの」「善なるもの」「ある」とされるものどもの各々が存在するのだとすれば、それらは「流れ」や「運ばれ」には明らかに似てはゐないだらう。

5. 結論的考察——

イ、「イデア論」に基づく考察が真実に当たるのかそれとも「ヘーラクレイトス一派の流転説」がさうなのかの考察は困難である。

ロ、他方での妥当ならざること——自らと自らの魂とを世話すべくも、諸々の名前に委ねること、それらの名前と名前の制定者らに信頼を置いてしまひ何かを知ってもゐるかのやうに言ひ張ること、自己自身もそして「ある」とされるものどもをも断罪し、何らの健全も何一つにもないのだとし、後はすっかり流転説の虜となつてしまふこと

- ハ、妥当ならざる態度で終止せぬためには勇敢で十分な考察こそが望まれること
- ニ、クラテュロス、流転説への固執を再度表明する。
- ホ、ソクラテス、クラテュロスのまたの教へを求めつつその田舎への出発を促し、今は問答を閉ぢる。